

巻頭言

再び「協同」を学ぶ

中川 雄一郎 (協同総合研究所 副理事長)

私は2017年2月26日に明治大学で開催された「全国よい仕事研究交流会」の第1分科会にコメンテータとして参加した。「さまざまな地域の『困りごと』に応えるなかで見えてきたものは」と題された第1分科会では、学童保育、地域福祉それに緑化・廃棄物回収に関わる4つの協同事業について報告がなされた。私はこれらの報告から「協同の多様性と共通性、それに地域性」を垣間見ることができた。その点で、これらの協同事業報告はそれぞれ、地域コミュニティの人たちが「市民の権利と責任を意識する」ことの重要性和「安定した人間的なコミュニティを想像する」ことの重要性の双方を捉えていた、と私は評価している。私は、それ故、ワーカーズコープが「さまざまな地域の『困りごと』に応える」とは、ワーカーズコープによる「人間的な統治」(ヒューマン・ガバナンス)の実践に外ならない、と観ている。

「ヒューマン・ガバナンス」はより公正な社会的秩序を創り出し、かつそれを維持し、福祉のための物質的資源をより公正に配分し、文化的資源をより適切に活かしていく、という人間本

来の要求に応じていくことを意味する。そのことはまた、ヒューマン・ガバナンスがより広い範囲の市民による合意形成に基づいて遂行され、持続可能なものになっていくことを意味する。こうして、ヒューマン・ガバナンスはより公正な社会秩序を脅かす社会的な緊張関係の原因を打ち消すことができるのである。それ故、協同組合としてのワーカーズコープの「さまざまな地域の『困りごと』に応える」実践は、地域の人びとの自治、権利、責任・義務、参加に基づく一連の政策を通じて、また「社会生活の利益と負担を共有する」ことによって、さらには多様な社会的、経済的、文化的な諸資源を公正に配分し、かつ有効に管理運営する方法を提示することで持続可能な地域コミュニティを創出していくのである。

このワーカーズコープの実践をより具体的に表現すれば、協同組合としてのワーカーズコープは事業を通じて人びとの相互関係を厚くし、個人の生活・労働のあり方をより良好なものへと変えていくことによって、その延長線上にある地域コミュニティの経済-社会

のあり方をより公正なものへと高めていくことを本務とする、ということになろう。言い換えれば、協同組合事業が「非営利・協同」という「形式と秩序」を以て「一連の拡大する環(サークル)」として展開されることにより、ワーカーズコープ運動は「特定の運動から普遍的な運動になっていく」のである。それ故にまた、ワーカーズコープの事業と運動は人びとを排除しない「社会的包摂的意識」を常にその基礎として維持するのである。

協同組合の事業と運動の基礎にあるこの「社会的包摂的意識」は、こうして、「人間の本源的關係としての協力・協同のあり方」をお互いに学び合い教え合うよう協同組合人を励ますであろうし、したがってまた、彼らによってその行為が推し進められるであろう。その意味で、ワーカーズコープの「本務」とその「形式と秩序」も、またその「協同の多様性、共通性、そして地域性」もワーカーズコープの組合員によって創り出される「協同の意識」の何よりの滋養となっていくだろう。したがって、コメンテータ役の私の「仕事」は、協同組合の事業がそれに基づいて実践されなければならない「協同の形式と秩序」の何であるかを組合員参加者に自己意識化させることであった、と私は思っている。

ワーカーズコープは常に、個人の尊厳に基づく「個人的行為・行動の社会

的文脈」を再確認する。というのは、個人的行為・行動と社会的実践は相互に依存し合うが故に、個人は権利を行使し責任を遂行することによって民主主義の発展に必要な諸条件を再生産するからである。「よい仕事」の原点はここにあるのであって、したがってまた、ワーカーズコープの原点もそこに存在するのであり、組合員としての権利と責任が相補的に遂行されることによってワーカーズコープは「人びとが協力し協同することの自己意識」を確かなものにしていくのである。

私は、この「よい仕事研究交流会」のコメンテータ役としてどのような締め括りのコメントを提示すべきか少々迷ったが、結局、ゲーテの次のような言葉を以て括ることにした。一つは「人は、自分が理解しないことを自分のこととは思わない」という言葉であって、レイドロー報告にも引用されている。もう一つは戯曲『ファウスト』の有名な「はじめに行為(行動)ありき」という言葉である。この言葉は、ルターが訳した「はじめに言葉(ロゴス)ありき」をゲーテ(ファウスト)が言い変えたものであるが、実は、それは「言葉」と「こころ(思い)」と「力」を総合した「行為(行動)」であり、「世界をその最も奥深いところで統^すべているもの何であるかを認識する」ことを意味するが、少々難しかったかもしれない。

市民自らが地域・社会をつくる時代を切り拓く
—「社会連帯経営」の深化が「よい仕事」の全面的発展を促す

全国よい仕事研究交流集会2017報告

2017年2月25、26日の2日間にわたって、「全国よい仕事研究交流集会 2017」が日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会主催、一般社団法人協同総合研究所共催で開催されました。1日目の全体会はニッショーホール、2日目の分散会は明治大学駿河台キャンパスで行われました。

本号では、601名が参加した全国よい仕事研究交流集会の全体会と、その前段として労協センター事業団の全国15の事業本部ごとに開催されたよい仕事研究交流集会の振り返りを2本の柱として特集しております。

全国よい仕事研究交流集会の全体会では、探検家として知られる関野吉晴さんを講師にお招きし、『仕事－共に生きるために』をテーマにお話いただきました。人類の700万年の歴史から、他の動物に狩られる対象であった人間は、食べ物をつかち合うことによって家族やコミュニティをつくり繁栄を続けてきたことや、現在を生きる狩猟採集民の生活から、食べる着るなど生き延びるための行為そのものが仕事であるという考えと、そうした暮らしからは格差が生まれないことを学びました。このように、人間とは何か、人間が生存を続けるための条件とは何かを問うことによって、仕事を通じた共生型の社会や地域づくりの輪郭を掴むことができたように思います。

パネルディスカッション I では、「協同労働がめざすよい仕事の本質はなにか」をテーマに、東京都のパル板橋桜川デイサービス、兵庫県尼崎市のはんしんワーカーズコープ、鹿児島県の国分地域福祉事業所ほのぼの3つ

の事業所より報告がありました。ここでは、働く仲間や利用者との関わりを掘り下げることで、よい仕事の本質を探ろうとしています。

パネルディスカッションⅡでは、「人と地域を結び動かすよい仕事－社会連帯経営と地域連帯経済の可能性」をテーマに、埼玉県の坂戸地域福祉事業所、北海道恵庭地域福祉事業所、愛媛県の地域協同組合無茶々園より報告がありました。この3つの事業所は、これまでよい仕事を継続し、全組合員経営から共感の経営

へと実践を高め、現在は、社会連帯経営に向かい果敢にチャレンジを続けています。

次号では、全国よい仕事研究交流集会2日目の分散会を中心にまとめます。会員の皆さまにはセットでお読みいただき「協同労働の協同組合」が、市民自らが地域・社会をつくる時代を切り拓く全面的発展の移行期の第一段に入ったことを読み取っていただき、今後の実践や研究に役立てていただけましたら幸いです。

(編集部)